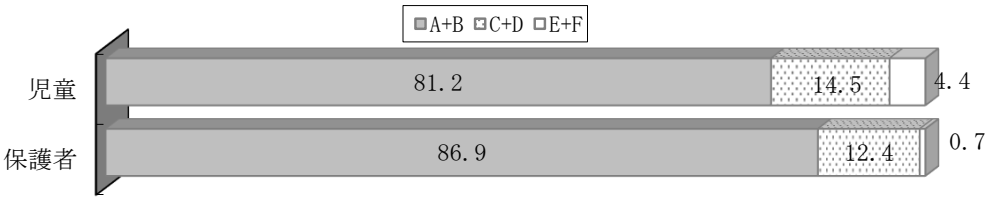
令和５年度　学校教育自己診断　小学校　（共通項目）

１. 学校の生活について

児童　　学校へ行くのが楽しい。
保護者　子どもは、学校へ行くのを楽しみにしている。

A:よくあてはまる　B:ややあてはまる　C:あまりあてはまらない　D:まったくあてはまらない　E:わからない　F:無回答

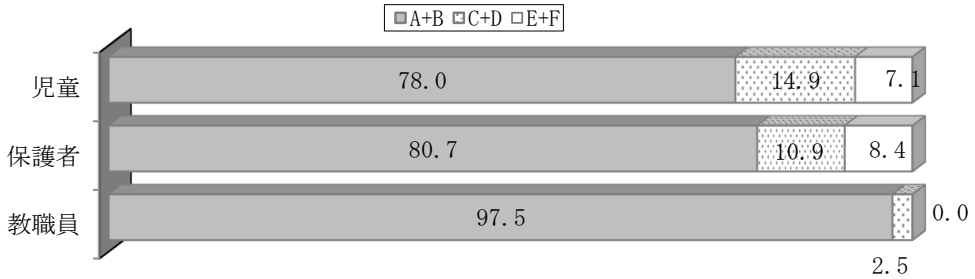


〔分析〕
前年度比:児童＋１．３%、保護者＋２．４%

前年度比で、児童・保護者の肯定的回答割合が微増した。また、前年度は否定的な回答及びわからない・無回答と答えた児童の割合が全体の２０%を超えていたが、今年は２０%を切った。
引き続き否定的な回答であった児童に対して、何が要因であったのかを様々な角度から見取るようにし、不登校の未然防止のためにも、すべての児童が安心安全に学べる取組等を通して、「魅力ある学校づくり」を推進していく必要がある。

２.「確かな学力」の育成について

児童　　学校で、自ら進んで学習に取り組んでいる。
保護者　学校は、子どもが進んで学習に取り組むように工夫している。
教職員　学校では、授業が「主体的に学ぶ力」がつくように工夫改善を図っている。

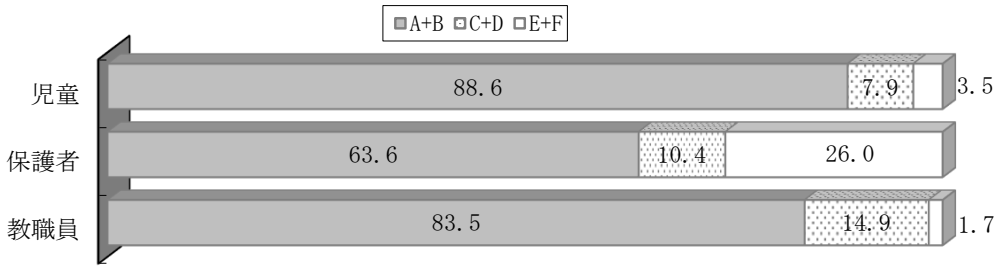


〔分析〕
前年度比:児童－３．０%、保護者－０．４%、教職員－０．１%
前年度質問内容
児童:学校で、主体的に学ぶことは楽しい。
保護者:先生は、授業が「主体的に学ぶ力」がつくように工夫している。
教職員:学校では、授業が「主体的に学ぶ力」がつくように工夫改善を図っている。

主体的、という文言の分かりにくさを考慮して、本年度の質問を作成した。結果としては児童・保護者・教職員ともに肯定的回答の割合が微減した。
各小学校では授業改善の取組を継続して実施しているが、それが本質的な児童の学習意欲向上に直結するのか、学習課題の設定は適切であるか等を常に振り返り、授業改善をさらに推進する必要がある。また、児童・保護者で1割弱のわからない・無回答の層に向けての発信を、引き続き行っていく。

３. ICTの活用について

児童　　学校で、コンピュータやプロジェクター、タブレット端末を使った授業をしている。
保護者　学校は、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使ったわかりやすい授業を行っている。
教職員　学校では、ICT機器(コンピュータやプロジェクター等)を使った授業づくりを推進している。

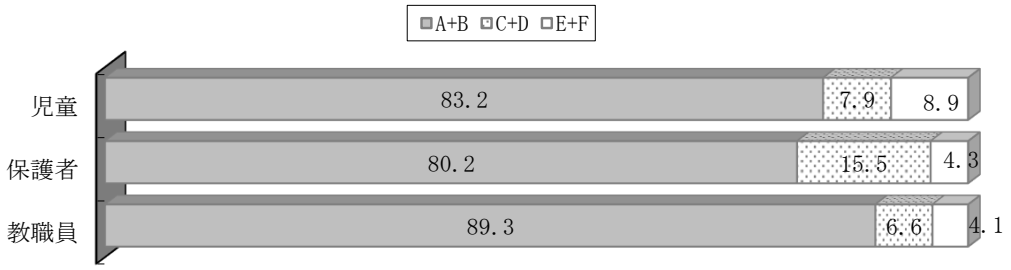


〔分析〕
前年度比：児童－５．５%、保護者－９．４%、教職員－１２．６%
前年度質問内容
児童：先生は、コンピュータやプロジェクターを使って授業している。
保護者：学校は、ICT機器（コンピュータやプロジェクター等）を使ったわかりやすい授業を行っている。
教職員：学校では、ICT機器（コンピュータやプロジェクター等）を使った授業づくりを推進している。

前年度と比較し、GIGAスクール構想で整備された１人１台端末の活用について、より具体的な文言で問う質問内容とした結果、児童・保護者・教職員のすべてで肯定的回答の割合が減少した。
１人１台端末について、ただ使用することが目的ではなく、各小学校が設定する教育目標に基づき、発達段階に応じた児童に身に付けさせたい情報活用能力を明確に設定した上で、端末の活用が図られなければならない。今後は、保護者等へも適切な周知を行い、各校の端末利活用を推進していきたい。

４. 学校の通知表について

児童　　通知表の内容は、納得できる。
保護者　通知表は、よくわかる。
教職員　学校の通知表は、児童・保護者にわかりやすく、適切な評価が行われている。

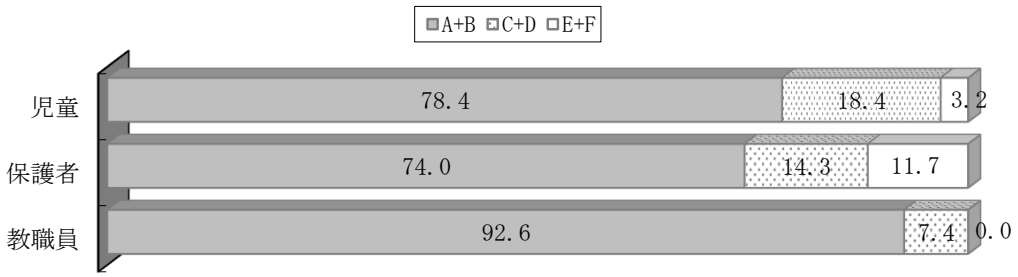


〔分析〕
前年度比：児童－３．１%、保護者－１．５%、教職員＋０．３%

児童・保護者共に前年度より肯定的回答の割合が微減、教職員は微増した。
依然として肯定的回答の割合は高水準であるが、指導と評価の一体化の例を出すまでもなく、各小学校で行われた教育活動のアセスメントの一つとして、そして、児童・保護者と学校の信頼関係構築に資するものとして、より信頼性の高いものを示すことができるようにしていく必要がある。

5. 自学自習について

児童　　自ら進んで学習(宿題、予習・復習、自主学習など)している。
保護者　学校は、自学自習力の育成を推進している。
教職員　学校では、自学自習力育成のため、学校全体で取り組んでいる。

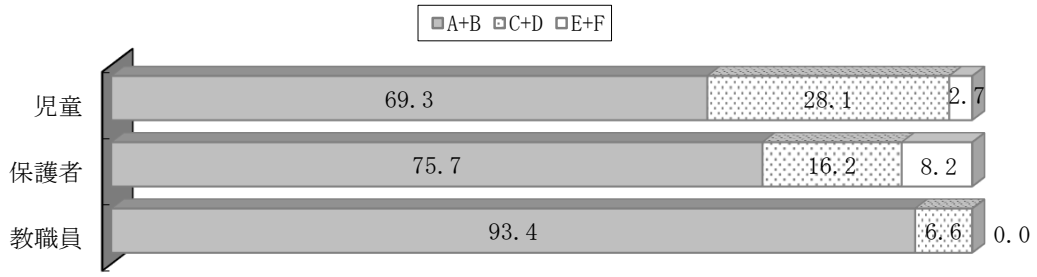


〔分析〕
前年度比:児童＋2．0%、保護者－0．2%、教職員＋2．0%

前年度と比較し、肯定的回答の割合が児童と教職員では微増し、保護者では微減した。
各小学校で続けてきた自学自習力向上の取組が、徐々に形となりつつあることが調査から伺える。しかし、保護者の回答ではわからない・無回答の割合が約12%いることから、各小学校での取組が家庭等へ浸透していないことが伺える。様々な方法での発信はもちろん、児童が取り組んでみたくなるような、課題の精選等にも取り組む必要がある。

6. 読書習慣について

児童　　読書をよくする。
保護者　学校は、子どもに読書の習慣がつくよう指導している。
教職員　学校では、子どもの読書習慣の定着に向けた取組を、重点的に行っている。

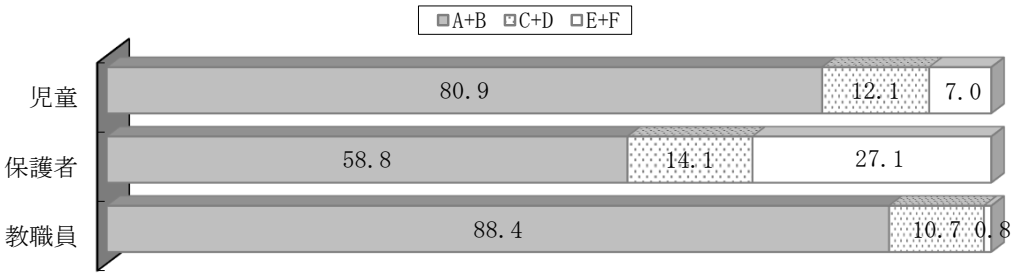


〔分析〕
前年度比:児童＋1．1%、保護者－1．8%、教職員－1．9%
前年度質問内容
児童:読書をよくする(マンガ以外の)
保護者:学校は、子どもに読書の習慣がつくよう指導してくれている。
教職員:学校では、子どもの読書習慣の定着に向けた取組を、重点的に行っている。

前年度と比較し、児童に対して一律にマンガを読むことは読書に含まない、との明記を止めた。結果、児童の肯定的回答の割合が微増し、保護者・教職員は微減した。
学習の基盤たる読書について、有用性を説くだけではなく、学校図書館司書とも連携して、子どもたちの「読んでみたい」「楽しそう」を大切にした取組を継続させていくことが重要である。また、学校における読書に関する取組をさらに保護者へ発信していく必要がある。

7. キャリア教育について

児童　学校では、役割を果たすことの大切さ(かかり活動や当番など)や自分らしく生きることや、将来について考える機会がある。
保護者　学校は、学年に応じて、子どもが生き方や将来について、考えられるような指導や役割を果たす大切さを伝える指導(キャリア教育)を行っている。
教職員　学校では、児童が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。

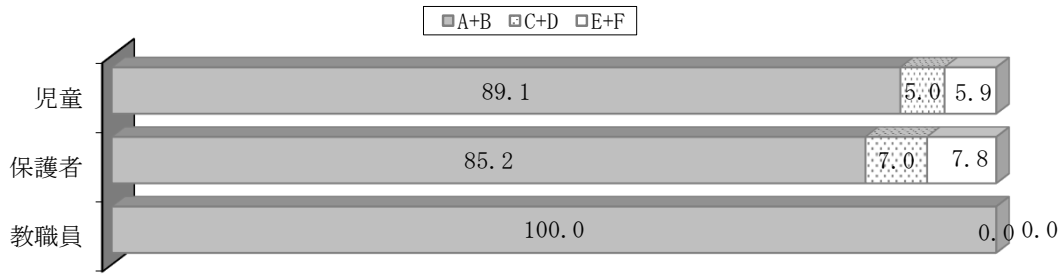


〔分析〕
前年度比:児童－4．1%、保護者＋3．2%、教職員－0．6%
前年度質問内容
児童:学校では、自分らしく生きることや、将来について考える機会がある。
保護者:学校は、学年に応じて、子どもが生き方や将来について、考えられるような指導(キャリア教育)を行っている。
教職員:学校では、児童が自己の生き方を見つけられるよう、各学年に応じた系統的なキャリア教育を行っている。

前年度と比較し、文部科学省のキャリア教育の定義を踏まえて文言を変更した結果、児童・教職員では肯定的回答の割合が微減、保護者では微増した。
小学校で行われる全ての教育活動が、最終的にはキャリア教育につながることを教職員も意識し、何を目標として何を実施するか、児童や保護者と共有して実践していく必要がある。

8.「心の教育」や規範意識の育成について

児童　学校では、お互いの違いを認め合い、人を大切にすることについて学ぶことができる。
保護者　子どもは、お互いの違いを認め合い、人を大切にすることについて学んでいる。
教職員　学校は、お互いの違いを認め合い、人を大切にする力を身につけるよう指導している。

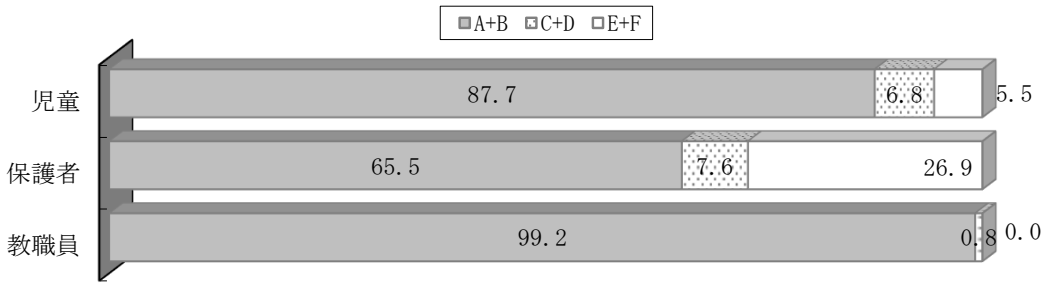


〔分析〕
前年度比:児童＋1．5%、保護者＋0．6%、教職員＋1．6%

前年度と比較して、児童・保護者・教職員すべてで肯定的回答の割合が微増した。
肯定的回答の割合が高い水準で維持できているが、否定的回答とわからない・無回答の割合を足すと、児童では約10%、保護者では約15%という数値であることにも着目すべきである。相互理解が進み、他者を大切にできる関係性は、言うなれば自分にとっても安心できる環境であることを踏まえ、道徳や特別活動の時間などを中心に、より児童が納得して「心の教育」を進めていく必要がある。

９．いじめ防止・対応について

児童　　学校では、いじめ防止の取組について学ぶことがある。
保護者　学校は、いじめ防止・対応の取組を行っている。
教職員　学校は、いじめ防止・対応の取組を組織的に行っている。

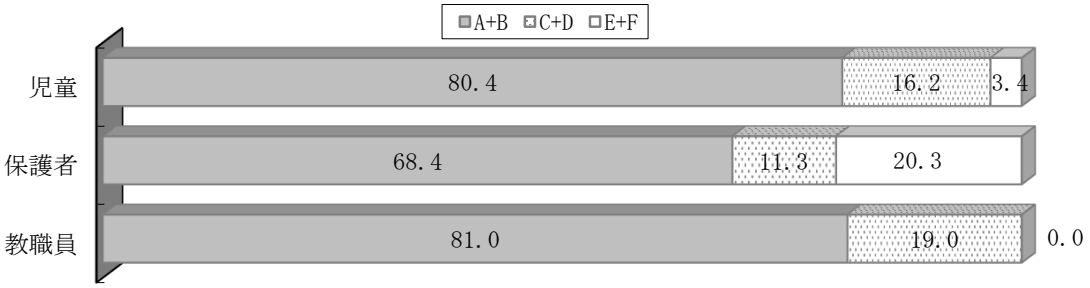


〔分析〕
前年度比：児童－１．９％、保護者＋３．６％、教職員＋０．８％

前年度と比較して、肯定的回答の割合が児童では微減、保護者・教職員では微増した。
各小学校では、「いじめ対応リーフレット」等を活用し、様々ないじめ防止の取組を行っているが、いまだ児童の約12％、保護者の約35％が否定的な回答及びわからない・無回答と回答している。積極的な情報発信はもちろんのこと、教職員からの一方通行でない、児童と協働したいじめ防止の取組や、保護者との共通認識を持つための取組を進める必要がある。

１０．「食の教育」について

児童　　給食の時間は楽しい。（低学年児童）
　　自分の健康を考えて給食を好き嫌いなく食べようとしている。（高学年児童）
保護者　学校では、子どもと食に関する話をしている。
教職員　学校では、食に関する指導を計画的に実施している。



〔分析〕
前年度比：児童－１．０％、保護者＋２．８％、教職員－７．２％

前年度と比較して、肯定的回答の割合については、児童で微減、保護者で微増・教職員では減少した。
今後も、栄養教諭等を中心として、各教科等と連携して食育の取組を継続させていくことはもちろん、児童が給食の時間を前向きに捉え、学ぶことが多い時間であると認識できるようにする体制づくりを進めていかなければならない。